別紙様式３（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　名　渡邊朝美

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

蘇曼殊研究—小説作品を中心に

論文要旨（別様に記載すること。）

（注）１．論文要旨は、A4版とする。
２．和文の場合は、４０００字から８０００字程度、外国語の場合は、２０００語から４０００語程度とする。
３．「論文要旨」は、ＣＤ等の電子媒体（１枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

蘇曼殊(1884－1918)は、清朝末期から中華民国初期にかけて生きた人物であり、現在、古典詩、短編小説、翻訳小説、雑文、書簡、書画など多岐にわたる作品が残っている。中国における蘇曼殊研究は、彼の死後、友人である柳亜子らが、『語絲』誌上で、作品、生涯などを体系的にまとめたことから始まり、現在、蘇曼殊に関する多数の論文が発表されている。

その研究テーマは、蘇曼殊の詩、小説、書画を論じるものから、蘇曼殊と似た境遇にあった李叔同(弘一法師)との関連性を論じるものまで多岐にわたっている。しかし、小説に関する論稿のほとんどは、蘇曼殊の数奇な生い立ちと小説の悲劇性とを結びつけるものであり、作品自体を詳細に分析したものはごく少数である。また、蘇曼殊を古典文学に属させるか、近代文学の先駆とするか、という問題にもしっかりとした考察がなされているとは言い難い。日本では、佐藤春夫らが昭和初期に蘇曼殊を日本人として紹介し、その後、謎に満ちた生涯をめぐって、ささやかな蘇曼殊ブームが起こった。だが、戦後から現在にかけては、ごく少数の人物が言及し、研究するにとどまっている。

これまで、蘇曼殊の作品中、詩歌は比較的高い評価を得てきたと言える。その一方で小説は、「鴛鴦胡蝶派のはしりである」などの批判的評価を受けてきた。郁達夫も蘇曼殊作品の持つロマンチックな雰囲気を評価しているものの、作品自体に対する評価は決して高くはない。澤田瑞穂氏も、「写情小説の一種であって、評判ほどに高い地位を得るものとはいえない」と、厳しい評価を下している。

近年は、小説の見直しを図ろうという動きもあるが、まだ充分とは言えない。蘇曼殊の小説は文言文で書かれており、男女の三角恋愛や悲恋などを題材としたものが多く、ややもすれば、これらの批判に簡単に納得してしまう。しかし、作品を注意深く見れば、文言文で書かれた作品の中にも、西洋小説からの影響が見られており、また古い制度の中で自分の生き方を求め、もがく人物たちが描かれている。安易に鴛鴦胡蝶派のレッテルを貼ることはできないのである。

本研究では、蘇曼殊の全小説作品の分析を通して、これまで「鴛鴦胡蝶派＝古典文学の殿軍」と見なされてきた蘇曼殊の小説が、西洋小説に影響を受けた「近代文学の先駆」であるということを明らかにし、蘇曼殊が小説の中に自身の内面の思いを織り込み、近代的概念である「個」を模索していたことを証明することを目的とする。

第 1 章では「断鴻零雁記」を分析した。この作品の日本描写は、ちぐはぐな印象を受けるものが多い。日本と中国の自然描写を対照し、さらに蘇曼殊の周囲の状況を考察することによって、蘇曼殊が日本に対して求めていたものは、あくまで中国的なものであったことを明らかにした。さらに、蘇曼殊が求め、作中に描いた中国とは、彼が生きていた清末、中華民国初期の中国ではなく、

中国がすべての面で繁栄し、輝かしい文化を誇っていた漢、隋、唐時代の中国であることを明らかにした。蘇曼殊は、日本の中に古代中華の美を見出だし、自分の筆に託していたのである。また、蘇曼殊が日本と中国を一衣帯水の文明圏であるということを認識することによって、混血児であることのコンプレックスから、無意識の自己救済を行っていた可能性も示唆した。

第 2 章では、未完の小説「天涯紅涙記」を分析した。この作品は、これまで未完であるがゆえに看過されてきたが、作品を丹念に読み解き、蘇曼殊の思想や当時の周辺状況と照らし合わせることによって、蘇曼殊が主人公燕影生に彼自身の愛国心や革命への思いを強く投影させていることが分かる。さらに、モチーフと主人公の形象を「焚剣記」へ継承させていることからも、蘇曼殊が「天涯紅涙記」のモチーフに執着を抱いていたことが分かる。これらの分析を通して、「天涯紅涙記」は未完であるものの、蘇曼殊の小説創作において軽視することができない作品であることを証明した。

第 3 章で取り上げた「絳紗記」には、これまでの中国古典小説には見られなかった時間の「倒置」という手法が用いられている。「絳紗記」ではさらに、蘇曼殊が以前「南洋話」や「嗚呼広東人」で訴えてきた中国国外で華人が受ける圧迫を作品の背景に取り入れている。また、蘇曼殊は「絳紗記」執筆時に『サロメ』に強い影響を受けており、4 組の男女の悲恋を描くことで、「運命の女」や「恋の測りがたさは死を超越する」というオスカー・ワイルドの思想を中国文芸史上、早い段階で取り入れていたことを明らかにした。

第 4 章では「焚剣記」を分析した。「焚剣記」は、蘇曼殊が『史記』「刺客列伝」から影響を受け、理想とする「侠」や「義」という中国古来の思想を作品の支柱とし、これまでの作品で描くことのなかった社会的に弱い立場の人物を描くことを通して、社会問題を鋭く描き、多くの愛国青年の支持を得た作品である。さらに、この作品ではそれと同時に、阿蘭の新しい女性としての意識の芽生えと出奔という行為から、イプセンの『人形の家』の影響が窺える。「焚剣記」は、中国文壇においていち早くイプセンの影響を受けた作品であると言え、中国古来の思想を支柱としながらも、近代的要素を持つ作品として大いに注目されるべきであることを述べた。

第 5 章では、蘇曼殊がアレクサンドル・デュマの『椿姫』に強い影響を受け、これまでの古典文学の才子佳人の物語と自身の愛情や人に対する理想に西洋の知識を織り交ぜ、「碎簪記」という作品を完成させ、中国恋愛小説を単純で強引な大団円から、無償の愛を描く悲劇へと前進させたことを証明した。蘇曼殊は西洋の恋愛小説の登場人物たちの中に近代的概念である「個」を見出し、自らの小説にそれを描くことによって、己の自我を模索し、確立を試みていたと考えられる。よって、「碎簪記」は、中国近代文学における恋愛小説の先駆と言え

るのだ。

第 6 章では、蘇曼殊最後の小説作品である「非夢記」を分析した。この作品は、飯塚朗氏に「『砕簪記』と同工異曲」と評価されている。確かに男女の悲劇的な三角恋愛を描いたという点で、両作品の印象は重なるが、「非夢記」では、燕生、薇香、鳳嫻は、それぞれの方法でもって自身の愛を全うしようとする。蘇曼殊は「非夢記」で、「砕簪記」で用いた西洋小説の要素を、再度練り直し、中国人読者に馴染み深いスタイルを保った、新しい恋愛小説を創作しようしていたのだ。それは、中国古典の名著『紅楼夢』の形を借りながら、シェイクスピア作品に着想を得ていることからも分かる。燕生、薇香、鳳嫻ら作中人物が自身の想いを貫き、個の尊厳を守ろうとあがくさまや、阿娟のような副人物が主人公の運命を動かすところに、シェイクスピアの「から騒ぎ」や「オセロー」の影響が感じられる。このように、「非夢記」の中では中国古典と西洋小説との要素がうまく共存していることを明らかにした。

蘇曼殊は出家をしたが、還俗し、還俗後は、何度か寺院に住み込んでいる。蘇曼殊のこれらの行動の理由は、推察にとどまるが、彼自身、夢珠や燕生のように、仏教の教えと世俗の情との間で揺れ動いていたと考えられる。本研究で確認してきたように、蘇曼殊は小説に、これまでの中国古典小説で描かれることのなかった、愛国心や革命に対する思い、そして、愛情に対する断ち難いあこがれという彼自身の内面の思いを描き込んでいるのである。

このように蘇曼殊の小説には、彼自身の内面の思いが込められ、西洋文学からの影響が数多く見られる。しかし、蘇曼殊の小説は、近代的要素を備えながらも、すべて文言文で書かれている。それは、蘇曼殊が小説を創作していた時代に口語で小説を創作、発表するということが難しかったことに加え、彼が文章の簡潔さや韻の美しさにこだわりをもっていたこと、簡潔で韻に工夫の凝らせる文言文が彼の感情を綴る際に、口語文よりも的確だったためと考えられる。また、本研究で確認したように、蘇曼殊は中国を愛すると同時に、古代中国とその文明に誇りと憧憬を抱いていた。そのため、西洋文学の翻案小説ばかりを重んじ、中国文学を軽んじている社会に対して、いらだちや憤りを感じていた。蘇曼殊は西洋文学を評価し、強い関心を抱きながらも、西洋文学を重んじるばかりに中国古典を軽んじるという他の文学者たちの姿勢が許せなかったため、西洋文学から得た要素を取り入れながらも、あえて古典小説の枠組みに文言文を用いて小説を創作していたと考えられる。中国古典の枠組みに西洋小説の要素を取り入れた小説スタイルは、混血児として生まれ、亡国の憂き目に直面し、誰よりも自己を見つめ、個性を追求することを余儀なくされた蘇曼殊ならではのものである。

このように、蘇曼殊は、新しい小説のスタイルを用い、男女の悲恋を通して

内面の思いを描き、さらには、個の尊厳と社会との衝突を描いている。そのため、中国古来の伝統と西洋文化との衝突に直面し、文化のはざまで彷徨っていた中華民国初期の知識青年たちの共感を呼び、彼らの間で蘇曼殊ブームが巻き起こったのだ。蘇曼殊は1917年以降の五四新文化運動前に小説作品の中で、これまでの中国古典小説では描かれることのなかった個人の内面の思いを描き、近代的概念である個の尊厳を求めようと試みていた。その作品は文言文で書かれているものの、五四新文化運動の精神をも内包していたのである。

以上のように、本研究では、蘇曼殊の小説の分析を通し、彼の小説作品が古典文学の殿軍ではなく、近代文学の先駆として中国文学史上に位置づけられるべきであり、それにともなった、しかるべき評価を与えられるべきであることを証明した。